

大阪商業大学学術情報リポジトリ

河内と東北 一坂上田村麻呂の影一

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2021-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/974

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



河内と東北

— 坂上田村麻呂の影 —

石上 敏

- 一、はじめに
- 二、平野のこと
- 三、「杜山」と「相山」
- 四、悪路王の末路
- 五、田村麻呂の影
- 六、おわりに

一、はじめに

畿内に大和朝廷が成立し、三関^①に象徴される「東・北への敵対」の姿勢を中央権力が露わにする前後から、日本列島の先住民たちは、さらに東へ北へと追いやられ、駆逐されていった。平城京から藤原京を経て平安京に権力の中心が移されるにつれて、そのような敵対姿勢は目に見えて強化されてゆく^②。

朝鮮半島での唐・新羅連合軍に敗れた白村江の戦いを経て、天智天皇六年（六六七）に築かれた金田^{かなた}（対馬）・屋島（讃岐）・高安^{たかやす}（大和）

の三城という、「西」に対する防御態勢に加え、壬申の乱を契機に天武天皇元年（六七二）ないし二年（六七三）に設置されたのが三関であるとされている。

ただし、高安城^{たかやすのき}が大宝元年（七〇一）に廃された（『続日本紀』。他の二城は記載されないが、同時期の廃城と思われる）のに対して、桓武天皇が三関を廃したのは延暦八年（七八九）であり、前者が烽火台^{のろし}としての機能のみを存続させたのに対して、後者はしばしば固関^{こけん}され、七八九年以降も実質的な機能を儀式化させつつも長く天保年間（一八三〇年代）まで存続させたという^③。それは、「東・北」の蝦夷討伐を旨とする「征夷大將軍（將軍）」職が、形骸化しつつも近世末期（一八六〇年代）まで存続したことと対応している。

「東」への守りに強い平城京や藤原京、あるいは難波宮などの地を捨てて、平安京という地を選んだことにはさまざまな背景があった。一概には言えないが（その地を選んだことによるメリットが、八世紀末の朝廷にとって大きかったことは理解できるのであるが）、三関に象徴される障壁を廃止して、なお防御を固め続ける大きなりスクをあえて選んで京都盆地に都を移した中央政權が、その後も時代を通じて「東」や「北」に警戒と敵愾心を向け続けることによって、結果的に日本列島の歴史地図は大きく更新された^④。

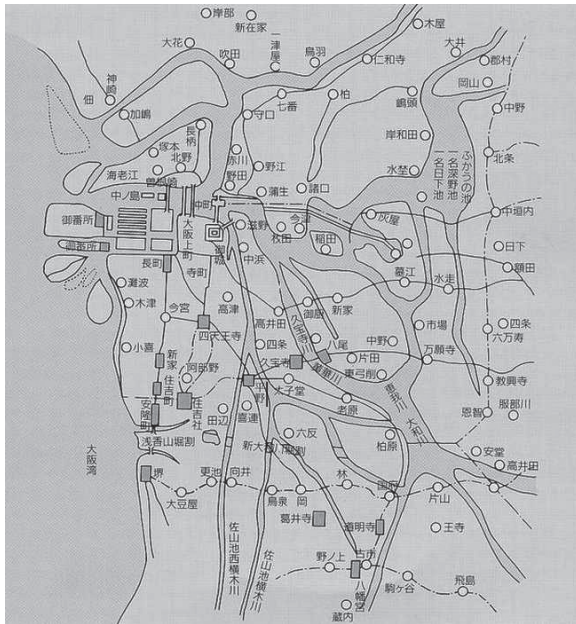
そのような「関」の思想は、彼らが「敵」と思い定めた者たちを追いつめてゆく先々に顕現し、九世紀初頭には、白河・鼠^{ねず}・勿来^{なこそ}の陸奥（奥州）三関という形をとって、「関」による境界を北へと推し進めてゆく。もちろんそこには、共通の「敵」を定めることによる内政の引き締めという、古今東西数千年にわたって共通する政治戦略が込められていたことも間違いあるまい。

本稿では、そのような新体制のなかで河内という地域がどのように位置づけられ、この地域独特の地域性の形成にどれほどの影響をもたらしたのかを、東北との関わりを中心に考察して行きたい。

二、平野^{ひらの}のいつ

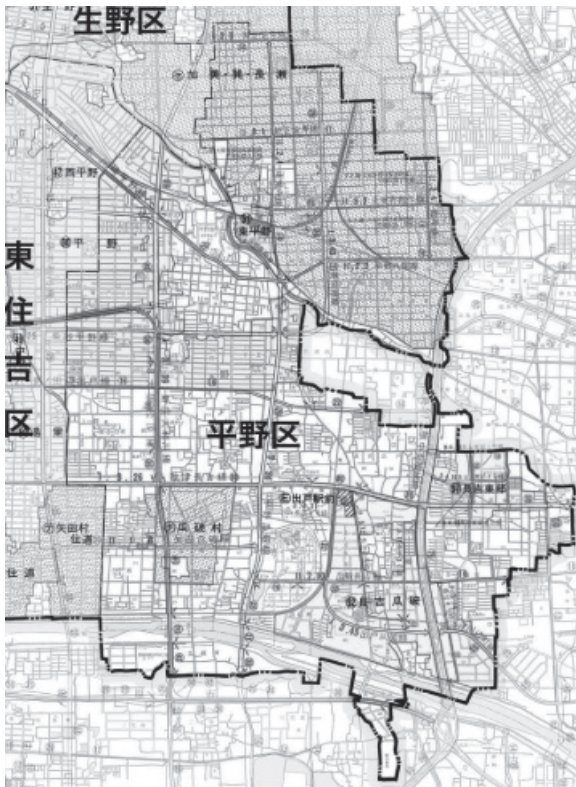
平野（大阪市平野区）は、大阪市の中でも異質な地域として知られてきた^⑤。狭山池横木川（東除川）と狭山池西横木川（西除川）とに挟まれた河内と呼ぶべき地にあり、河川によって難波とも河内の全体ともつながる好立地を占め、一方で港湾を擁する住吉とも陸路によって結ばれていた。そのため、はやくからその周辺には渡来人たちが住み、さまざまな先進的文化を伝えた（図1参照。中央やや左下が平野）。

図1 大阪平野古地図(撰河兩國水図)⁸⁾ 大阪府提供



室町時代には、自由都市界に匹敵、ときに凌駕するほどの環濠都市として町衆による自治が発達し、江戸時代にかけて貿易業に支えられる商業によって殷賑を極めた。それも、一時は堺をしのぐ取引高を誇るほどの、貿易商人たちの拠点だったのである。⁸⁾そして、その頃まで、こは住吉津と深く関わる「撰津平野」⁹⁾であった。そこに河内の一角を加えたのが現在の平野区である。昭和四十九年(一九七四)に至って東住吉区から分かれた若い区⁷⁾で、大阪市の東南端にありながら人口規模は二十四区の中で最大であるのも、面積が三位という広さもあることから、時代を通じたこの地域の地域的ポテンシャルの高さを示している(図2参照)。

図2 大阪市都市整備局 土地区画整理事業等の換地確定図⁹⁾



このように近代に至って河内（中河内郡）の一部を取り込んで拡大したが、現在もなお、区の中心部一帯をそのまま「博物館」にしてしまおうという構想など、特色ある地域として知られ、大阪弁で「平野（ひらの）」と、「ら」にアクセントを置いて呼ばれる時には、独特の色合いを帯びて発音される。そのことに象徴されているかのようには、ここはかねてより「少し変わった」地域だった。

そもそも「平野」という地名は、征夷大將軍・坂上田村麻呂の嫡男である広野麻呂が朝廷から土地を賜り、この地に住んだことに由来するという。「広野」が「平野」に訛なまったという説明は、「なにわ」が「魚（な）」の「庭」であると説くのと同様、いかにも大阪らしい。

『日本後記』⁽¹⁰⁾によれば、坂上広野は天長五年（八二八）に没しているが、大念仏宗（現在は融通念仏宗）の大本山である大念仏寺の『大念仏記』には、平安時代末期に当たると大治二年（一一二七）に開祖である聖応大師良忍が靈夢を得て広野（坂上氏ということであろう）の私邸内に建てた修楽寺がその元になっているとも、修楽寺の別院ともいう。その十年前の永久五年（一一一七）、良忍は阿弥陀如来から偈文を授かり、開宗に至った。ここが日本最初の念仏道場であり、開発領主としての坂上一族が摂津国住吉郡に拓いた平野庄（平野殿）は、融通念仏の道場が契機となって発展した地域であることに間違いはない。

天台僧の良忍が、どのようないきさつで鳥羽上皇の勅願を得て、この地に融通念仏の道場を開いたのかは不明の部分も残るが、第六世の良鎮（寿永元一一八二年没）までの半世紀余りは、順調に宗勢を拡大したようである。しかし、その後ふるわなくなり、平安時代の終わりを迎える。おそらくそれは、平安末の混乱期に当たって、莊園としての平野が経済的に「回らない」状態になったことに由来したであろう。

そして、鎌倉時代もあと十年余りで終わろうという元亨元年（一三二一）に至り、第七世を継いだ法明が大念仏宗を再興する。後発の浄土宗や浄土真宗など念仏系の浄土教が、鎌倉新仏教の中でも特に急速に宗勢を拡大した時期であり、それらの動きに助けられたところもあったのだろう。

はたして「平野」が広野麻呂の「広野」から来ているのか否か、そのことは今は問わない。ここでは、現在は大阪市の一部に含まれている広野麻呂の拝領地が、本来は河内の一角を含んだことを改めて確認しておきたい。その上で、なぜこの地域が「河内」であったのかと問いかけたい。すなわち拝領地が、都の置かれて間もない平安（京都）周辺の地ではなく、なぜ河内、それも都とは正反対の方角であったかということである。そこが現在の大阪市でいえば東南のはずれ、かつての中河内の西南のはずれであり、摂津・和泉・河内の三国が寄り合わさった「国境」の地であることを付け加えておく。すなわち、そこは、どこから見ても辺境であった。

そして、そのような河内の一角が広野麻呂の父親である田村麻呂、その後、断続的に幕末まで続く將軍（征夷大將軍）職の名を日本で最初

に与えられた人物と深く関わるということをも、ここでは改めて確認しておきたい。

広野麻呂に河内の一角が与えられる要因となった父・田村麻呂の「功績」の帰趨に関して、『日本紀略』延暦二十一年(八〇二年)より抜粋すれば、以下の通りである。⁽¹²⁾

「夷大墓公阿弓利為、盤具公母禮等、種類五百餘人を率いて降る」(四月十五日条)

「造陸奥国胆沢城使・坂上田村麿来たる。夷大墓公二人並びて従う」(七月十日条)

「夷大墓公阿弓利為・盤具公母禮等を斬る。此の二虜は並に奥地の賊首なり。二虜を斬る時、將軍等申して云ふ。此の度は願ひに任せ返し入れ、其の賊類を招かんと。而るに公卿執論じて云ふ。野生獸心、反覆定まりなし。(中略)奥地に放還するは、いふところの虎を養い患を遺すなり。即ち両虜を捉へ河内国楯山に斬る。」(八月十三日条)

四月十五日、アテルイやモレたちは、総員五百名以上を率いて降伏した。すでにこの年、造陸奥国胆沢城使に任命されて討伐に赴いた田村麻呂は、七月十日、完成した胆沢城でアテルイやモレに面会したと読み取れる。降伏以来約三か月。アテルイたちは、その間、東北のどこかに拘留されていたというのであろうか。胆沢城の築城まで東北経営の拠点は多賀城であったが(多賀城碑によれば七二四年に築城)、面会のために多賀城(宮城県多賀城市)から胆沢城(岩手県奥州市)までを移送したとは思えず、新たな東北経営の拠点となる胆沢城が完成するまで、その近くに留め置かれたものと考えられる。

八月十三日条によれば、田村麻呂ら(おそらく遠征軍の面々であろう)は、連れ帰ったアテルイとモレの二人を故郷に帰して賊軍のおとりにしたという提案をおこなった。ところが、公・卿・執らは否定したのだという。すなわち、桓武天皇をはじめとする平安京の官僚たちは、処刑を主張した。野生の獸(にも似た未開人)の心は変転極まりない。いくら現在には忠誠を誓っているとしても、再び未開の地に放てば、いわゆる「虎を放逐して災いを遺す」ことになる。そして、アテルイとモレの両名は処刑された。

田村麻呂にとってみれば、本心では放逐は許されないと知っていたのだとしても、解放を期待させて遙々畿内まで連れ帰った捕虜である。アテルイとモレも、そのまま再び帰還できるとは思っていなかったに違いない。しかし、それでもいったん放逐を主張したことは、逆に彼らの命を弄んだことになる。仮に田村麻呂にその意識がなかったとしても、結果的にそうなった。したがって、田村麻呂の「言の咎」⁽¹³⁾によって

生命を弄ばれたアテルイやモレが怨霊となったとしても不思議はなく、時代背景から考えても、むしろそうであるほうが自然であった。にもかかわらず、彼らの処刑には、そのような噂や伝承が不思議なほどに付随してこない。それは、彼らが化外の者であり、怨霊化の資格から外れていたということが最も大きな理由であろう。¹⁴しかし、処刑には魂魄を鎮めるための地が選ばれたのに違いあるまい。

遷都したばかりの平安京、またはその近辺ではなく、河内が選ばれたのも、第一にそのような理由によつてであろう。また、そのような力学がはたっていたのであれば、できるだけ辺地が選ばれたことにも納得が行く。ちなみに、『日本紀略』の記述からは、「両虜を捉へて」斬つたのが田村麻呂であったのかどうかは明確ではない。

七月十日の胆沢城での会見から数日以内に出立したとしても、平安京までは約八三〇キロメートル（当時の単位で約一五五〇里）の行程である。いくら四月十五日にすでに五百人も的人数が投降していたとしても、護送の道中、アテルイとモレの奪還を図る勢力への警戒は怠ることができなかつたはずである。よつて、『日本紀略』の記述にもとづくならば、八月十三日の斬首は処断が決まつてから極めて迅速に執行されたと考えられる。そして、助命請願の記録だけが残つた。

八月十三日条に見る関連記事末尾の「河内国楯山」は、「杜山」とも「植山」とも記し、一定しない。¹⁵私見では、次節のように「杜山」を採る。その理由も含め以下に論じて行きたい。

三、「杜山」と「楯山」

延暦二十一年（八〇二）旧暦八月十三日（新暦九月十三日）、アテルイとモレの両名は処刑された。このことに関して、坂上一族と河内とのかかわりとして見過ごせない一事がある。赤坂憲雄氏は、『東北学／忘れられた東北』¹⁶の5章「大同二年に、窟の奥で悪路王は死んだ」に、次のように記している。

「悪路王とは誰か。『日本紀略』によれば延暦二一（八〇二）年、征夷大將軍として胆沢城を築いた田村麻呂のもとに、夷大墓公阿弓利^{たいもつきみあてる}為と盤具公母礼^{ばんぐのみれ}が五百人をひきいて降つたが、田村麻呂の嘆願にもかかわらず、河内国杜山に斬られた、という。このアテルイが悪路王

に重ね合わされた可能性はある。」(九五頁)⁽¹⁷⁾

東北の地に盤踞して、平安朝廷に反乱を起こしたという悪路王^{あくろおう}がアテルイであったというのは、その通りであろう。しかし私には、この逸話に触れて、あるひっかかりが生ずる。赤坂氏は「アテルイとモレは捕囚として都に連れてゆかれ、処刑された」と端的に述べているが、そうではない。「河内国」で処刑されたのだ。

のちに鎮守府が置かれることになる胆沢城^{いさむのき}(岩手県江刺郡)、もしくはアテルイたちの居窟と伝わる達谷^{たつこ}(岩手県西磐井郡平泉町)から都(京都)までは、本州の半分もの距離を移動するという、まさに列島縦断の大移動である。東北に拠点を置いて『東北学』を書いた赤坂氏の視座からは、都(山城)も河内も、さほどの違いなく見えたのかもしれない。しかし、それは断じて違う。

「相山」「杜山」「植山」というのは、いずれも現存しない地名である。「杜山」に至っては「もりやま」なのか「とやま」なのかも明確ではない。ただ、その場所はおそらく北河内、それも、淀川からさほど遠くない交野郡^{かたの}(現在の枚方市・交野市)のあたりかと考えられる。

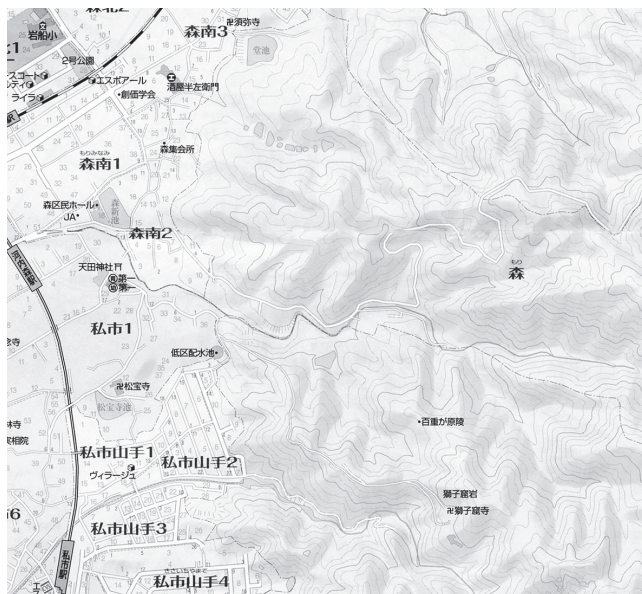
交野ヶ原と呼ばれたこの一帯では、平安時代には鷹狩りが盛んに行なわれていた、平安朝廷にとつての「殺生の場」であり、そのため一般人の出入りが禁止され、千年にわたって「禁野^{きんや}」と呼ばれた。「世中^{よなか}にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」が載る『伊勢物語』八十二段に描かれて、よく知られる悲劇の皇子・惟喬親王^{これか}と在原業平との交友のエピソードでも知られている⁽¹⁸⁾。

言い換えれば軍事演習の行われる駐屯地であり、近代に入ってから陸軍の火薬庫が置かれた。二度の爆発事故、とりわけ「昭和の大爆発」は多数の犠牲者を出して、地元では今でも語り継がれている⁽¹⁹⁾。いわば特殊な徴^{しむ}の付いた土地であり続け、一般の者たちは足を踏み入れることのできない禁忌の地であり禁足の地であった。管見の限り、他にこのように呼ばれた地はなく、少なくとも現在まで地名として残っている「禁野」は、日本全国でここだけである。

現在の地名表示としては枚方市西部に禁野本町一、二丁目、西禁野一、二丁目があり、計〇・五平方km余りの面積を占めている。近隣に、惟喬親王ゆかりの渚院^{なすのいん}に由来する「渚」のつく地名が渚本町・渚元町・渚栄町・渚東町・渚南町・渚西一〜三丁目、渚内野一〜四丁目と多数、面積を合算して約一・四平方kmあるが、それらは江戸時代の禁野村、そして近代に至って字禁野の一部であった。

平安京内裏からは、ほぼ六里(約二四km)の距離があるが、すべて賀茂川・淀川の水運でつながっており、移動にはさほどの時間がかからない。このあたりは現在に至るまで河内の中でも色濃く京都文化が浸透した地域である。とはいえむろんここは都ではなく、あくまでも王城

図3 森の位置⁽²³⁾



の地を離れた辺境であった。

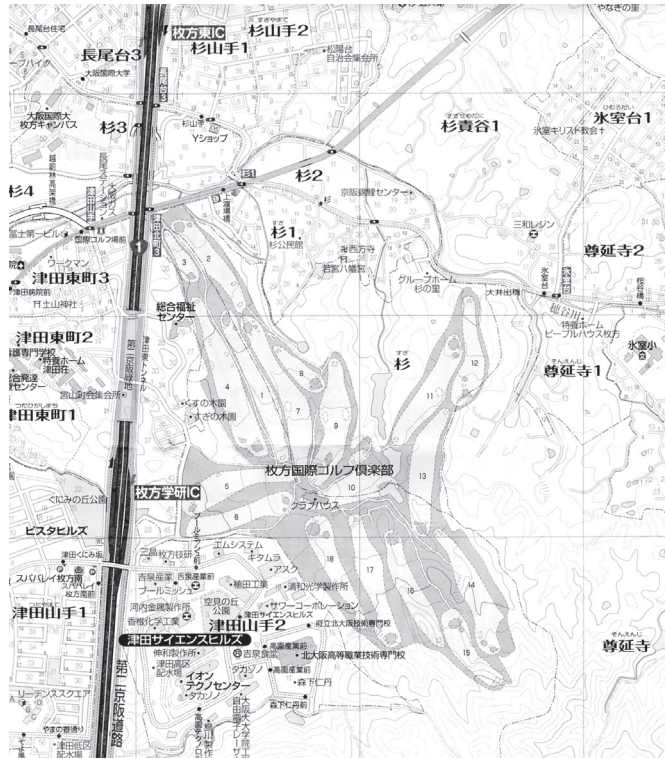
ここに「梶山」や「植山」を退けて「杜山」を比定すべき文献的根拠はない。ただし、淀川をやや下ったところに「守口」があり、これは周知のごとく豊臣秀吉以来の「城を守る口（守の口）」であるとともに、むしろそれ以前は「森（杜）の口」であったゆえの地名と考えられる⁽²³⁾。そして、私はその「守（杜）口」の奥に控えるのが「杜山」であったと考えるのである⁽²³⁾。

私はここで、「杜山」という地名を微かに伝える現存地名として、現在の交野市にある「森」を挙げておきたい（図3参照）。生駒山を背後に控えた里山であり、私市に隣接する地域である。平安京からは直線距離にして二〇km余りのところにあり、京阪交野線には終点私市駅の一駅前（北へ約1km）に「河内森」駅がある。多くの人が行き交う市場という性格を考えれば、その地に隣接した場所に処刑場が設けられるというのは、非常に説得力のある土地柄ではないか⁽²⁴⁾。古墳時代からの遺構が認められ、とりわけ森遺跡には鍛冶工房の遺構が検出されて、鉄器の供給地と目されている。近代の大字森（現在の交野市森地区）と私市とは、雷塚古墳周辺の森古墳群が立地する山地を挟んで東北と西南に分かれているが、かつては同じ地域であった可能性が高い。

「北河内の地域では五〇〜一〇〇m級の前方後円墳が穂谷川や天野川流域と山地部の森古墳群が築造される。北接する淀川の水通を管理する首長とも考えられる。森遺跡は、その中心に位置し、古墳時代中期から後期にかけて鍛冶工房の遺構が広い範囲に検出され、鉄淳、輔羽口、砥石等と共に韓式系土器の出土があり、当地域の鉄器を供給する測点の遺跡である。」⁽²⁵⁾

「梶山（杉山）」というのは、この地域の植生から考えると、やや違和感が残る。平安時代、あるいは命名されたからの時間を見て古代まで遡るとしても、河内に針葉樹の「梶山」があったとは考えにくいのである。さらに、当時植

図4 杉の位置²⁴⁾



すでに記したように、かつての植生から考えるならば、この時代、この地域に、地名として残るほどの(イメージとしては一山を覆うほどの)針葉樹林(杉山)が存在したということは、いささか考えにくい。縄文杉どころか、杉は約一六〇〇万年前から日本列島に存在する在来植物であり、「栂山」という地名のついた時代も明確ではないのだが、河内に杉のつく地名はほとんどなく、この点については違和感が残る。

林された「植山」があったとは考えられない。はやく天武天皇五年(六七六)には、畿内山野伐木禁止の勅令が出されているが、その後も巨大な寺院建築や都の造営工事が続いて、畿内の森林はさらに荒廃した。その頃伐採された原生林(広葉樹林)は、たとえば泉北丘陵では七世紀後半頃までに次々に松(アカマツ)林に変わって行ったという。ただし、組織的な植林が始まるのは室町時代に入ってからで、畿内では吉野川の杉がその濫觴である²⁶⁾。

むろん、九世紀初頭までに「栂山」や「植山」といった地名が存在しなかったことを証明する根拠とはならないが、以上のことから、「杜山」「栂山」「植山」の中で最も可能性の高い地名は「杜山」であったと考えられる。

ただし、枚方市には大字名として「杉」も存在する(図4参照)。JR片町線(学研都市線)藤阪駅の周辺であるが、現在は、町名表示「杉」の北側一帯に、織田信長侵攻の記憶をとどめる「杉責谷」や「杉山手」「杉北町」などが広がっている。交野市の「森」からは直線距離で約5kmで、西を流れる淀川と並行して上流の杉(東北)と下流の森(西南)という位置関係にある。守口は、さらに約一〇km下流に当たる。

一方で、処刑場ということに着目するならば、江戸時代に大坂町奉行をつとめた久貝因幡守（初代正俊）の屋敷跡（現・陣屋裏）の「乾と巽」方向にあったという「処刑場」が気に掛かる。かつて交野ヶ原と呼ばれていた交野郡の一角であり、長尾山の山裾（枚方市長尾）にあったという。長尾は、先述した杉（枚方市）のすぐ北側（図4左上）に当たる。

乾（戌亥）は西北、巽（辰巳）は東南であって真逆に当たるため、「乾と巽」にあったという意味がよくわからないのだが、処刑が実施される十二月二十日には、地元住民たちは外出を控えたという証言すらある（『河内・歴史の古里』）。おそらく、それは具体的に戊辰戦争（伏見の戦い）の折のことを指すものと思われるのだが、とりわけ穢れを伴う場所（土地の記憶）が容易に人々の意識から去らないことは、数々の事例があつて動かない。「北河内大阪方面から多くの『罪人』が処刑されるために集められていた」（同前書）という久貝家屋敷から、わずか一〇〇メートルほどの所には「死骸谷」と呼ばれる場所すらあつたという。

ただし、江戸時代であれば、交野郡尊延寺村の豪農・深尾氏の出である才次郎が、洗心洞に学んで大塩平八郎の乱に参加したゆえに、この地で自害しながら塩漬けにされ、大坂で「さらし刑」にされたように（同前書一六〇―一七頁）、処刑は町奉行所のある大坂三郷（市中）で行なわれるのが通例であつた。よつて、上記の「大阪方面から（中略）集められていた」については、いささかの疑問が沸くのだが、かねてより、この地にそのような場所があつたことは間違いないであろう。

尊延寺村は旧交野郡の旧川越村中にあり（図4右）、同じく村野（枚方市村野）には高札場があつて、この高札場では「外者」（よそ者）がさらし首になることもあつたという（同前書、一八頁）。いずれも、交野ヶ原の一角である。

処刑場が全くの無人の地に置かれることは、当時処刑が見せしめの目的をもつて行なわれたことを考えれば、およそありえないことである。いくら九世紀の初頭であつても、そうであろう。ましてや、アテルイたちは現在の岩手県からはるばる連れ帰つた、叛乱者にして死刑囚たちである。誰の目にも止まらぬ無人の地で、ひっそりと処刑が行なわれたとは考えにくい。

とはいえ、まだ平安時代が始まつて間もなくの頃である。のちの中世（鎌倉・室町時代）、すなわち武士が戦乱に明け暮れた時代のように、人々はまだ人間の血を見ることに慣れていなかった。それどころか、この直後（弘仁九〇―八二八年）には、死刑停止を盛り込んだ弘仁格が嵯峨天皇によって発出され、以後、平安時代は表向き「死刑のない時代」として三五〇年続くことになる。具体的には、大同五年（八一〇）から保元元年（一一五六年）までの三四六年間である。葉子の変の藤原仲成らから保元の乱の源為義らまで、ということになるが、これは平安時代が始まつて十六年目から、あと二十九年（三十三年とも）で鎌倉時代が始まるまで、平安時代がほとんどすっぽり収まる期間であつた。

ただし、実際にはこの期間を通じて死刑は行なわれていたらしい(『平安時代の死刑』)。天皇が命を下すような、いわば国家行事としての死刑が執行されなかっただけということのようである。よって、あるいはこの「杜山」(椋山)などは、その後も死刑が続けられた場所に当たる可能性がある。

もちろん、アテルイらの処刑は、『日本紀略』を参照するまでもなく、天皇が命を下すほどの国家行事としてのそれであった。もし薬子の変がなかったならば、延暦二十一年(八〇二)のこの処刑が、表向き一五六年まで続く「平安時代の死刑空白期」の開始事例として記録されていたかもしれない。このように、処刑という歴史的事象に照らすならば、かつて処刑場があったと伝えられる長尾に隣接する「杉」(枚方市)のほうに一日の長があると言えるだろうか。

ところで、「杜山」について、もうひとつ想起されるのは、坂上田村麻呂以前の日本(大和朝廷)の歴史の中で最大の武人であった物部氏であり、守屋とかかわる「森山」である。たとえば、長野県伊那市高遠町にある守屋山(森山)の山麓には物部守屋を祀る守屋社(通称・物部守屋神社)が鎮座する。『信濃奇勝録』(天保五〇一八三四年)には、丁未の乱(五八七年)で蘇我氏に滅ぼされた守屋の一角が守屋山(森山)に逃げ隠れていたが、神長(諏訪大社上社の祀職)の養子となって、守屋山に父・守屋の霊を祀ったという伝承が記されている。²⁰⁾

「守屋山」が「森山」「杜山」へと変遷した事例が、信濃以外にも存在するのではないかと類推が成り立つのであれば、物部本宗家の拠点であった中河内(現在の八尾市から東大阪市にかけて)の周辺にも、その可能性を想定することがあってもよいものと思われる。

このように、「杜山(森山)」や「椋山(杉山)」が北河内ではなく、かつて平野が属していた中河内地域であった可能性も考えられないわけではない。中河内であれば、広野麻呂拝領の地が、のちの平野であったことも整合性がとれる。しかし、そうであれば、やはり文献のどこかに記されてよいことであった。そうでなかったのは、おそらくその場所が機密上隠されたということではなかったか。そう考えれば、上記の「禁野」(交野ヶ原)がそうであった可能性が、やはり高いと思われるのである。

『河内・歴史の古里』の著者である森迫氏は、こんなふう述べている。

「交野と京都はお隣り同士、都へは二十キロ程離れていても、その山々は一望に開けて、正面に見えるやわらかな姿の比叡山、その右の谷は山科で、その右は醍醐の山、更に右へは笠置に至る連山である。」京都と交野との距離感が手に取るようによくわかる一文なので、掲げておきたい。²¹⁾

以上、アテルイやモレが処刑されたという場所を探してきたのだが、能楽の『雲雀山』に「交野の御野禁野につゞく天の川」と謡われるよ

うに、「交野の禁野」「交野ヶ原」とは、天野川から北へと広がる淀川左岸（東岸）一帯、現在の交野市と枚方市の大半を含んだ地域であった。そこには「森」も「杉」も含まれている。おそらくここで、かつて東北から連れ帰った朝廷への反逆者たち（とはいえ彼らにとってみれば、侵略者から自分たちの土地を守っただけのことである）が処刑されたのであろう。

四、悪路王の末路

悪路王とは、手近な『朝日日本歴史人物事典』⁽³²⁾によれば、

平安前期、坂上田村麻呂や藤原利仁に滅ぼされたと伝えられる人物。蝦夷の族長阿弭流為（阿弭利為とも）の訛ったものとの見方もある。達谷窟（岩手県平泉町）を巢窟としたといひ、これを討った田村麻呂は、そこに京の鞍馬寺を模して九間四面の精舎を建立し、多聞天の像を安置したと伝える。文治五（一一八九）年九月、源頼朝は平泉を攻撃し藤原泰衡らを討滅したあとこの窟に立ち寄り、田村麻呂の武勇譚を聞いている（『吾妻鏡』）。いま茨城県桂村の鹿島神社と同県鹿島町にある鹿島神宮には田村麻呂が納めたという悪路王の首級（木造）が伝えられており、前者は元禄年間（一六六八～一七〇四年）、徳川光圀が修理したもの。これらの事実は、蝦夷社会に広がった鹿島神に悪路王の怨霊の慰撫が求められていたことを示すものであろう。

という。短文ではあるが、平安期における朝廷の東北戦略が端的に記述されており、「悪路王」という個人の事蹟を超えて、中世から近世にまで至る通時的な田村麻呂現象の展開をも示している。ここからは、

- ① 悪路王はアテルイが訛ったもの。
- ② 岩手県平泉の達谷を本拠とした。
- ③ 『吾妻鏡』によれば、頼朝が田村麻呂の武勇を聞いたという。

④ 鹿島には田村麻呂が納めたという悪路王の木造の首級がある。

以上の四点に注意しておきたい。

①は、すでに述べたように同意できる。ただ、「悪路王」を「アテルイ」の「訛(なま)ったもの」と一言で片づけるのは早計だろう。「悪路」とは、平安京を旅立って東北に至るまでの田村麻呂をはじめとする平定軍(征服者)たちの「実感」を込めての命名と思えるからである。そして、上に見たように平定後にアテルイたちを遙々連れ帰った田村麻呂の遠路をも想起させる。⁽³³⁾

②は、当然のことに平安時代末期の源平合戦を即座に想起する。『源平盛衰記』などが描く平泉の険峻な地形が目前に浮かび上がるだろう。達谷窟毘沙門堂で知られる「達谷」(岩手県西磐井郡平泉町)は、北上川の支流である太田川が削り取った峡谷の先端部にあり、まさに天然の要害である。アテルイの本拠というのは、その崖や窟を使って砦が築かれたのだろう。

そして、岩手県の最南部に位置する達谷は、おそらくアテルイたちの前線基地に相当しただろう。ここから胆沢城までは約三〇km、さらに約六〇km北上すれば志波城に至る。現在の八幡平市から一関市まで、北上山地と奥州山脈のあいだを縫うように南流する北上川によって削成された北上盆地を、ほとんど南北に結ぶ線上に位置し、現代と同じく、このラインが彼らにとって最重要であったことをうかがわせる。

③は、②にも挙げた源平合戦の帰趨ともかかわって興味深い。文治五年(一一八九)というのは、頼朝が後白河院の崩御によって征夷大將軍に任じられる(自ら任じさせる)に至る建久三年(一一九二)の三年前である。頼朝の征夷大將軍就任は、まさに田村麻呂以来四百年近い時間を超えて、頼朝が征夷大將軍にこだわったきっかけのひとつともとれるからである。⁽³⁴⁾

そして④は、鹿島神宮がなぜ田村麻呂、そして悪路王と関わってくるかという問題である。むろん武威・武勇の神として鹿島神は著名である。畿内においても、すでに神護景雲二年(七六八)には春日大社が造営されており、周知のごとく、四祭神の中心を成すのが鹿島から迎えた武甕槌(タケミカヅチ)命であった。これは、田村麻呂が生まれたとされる天平宝字二年(七五八)の十年後のことである。

日本国の「正史」(『東北学』九四頁)には一度も登場しないという悪路王、そして赤頭の名は、赤坂氏によれば、『吾妻鏡』以降「謡曲・浄瑠璃・語り物などのなかに、さまざまヴァリエーションをもって語り継がれてゆく」(同前書)。鎌倉時代末期に成立したとされる『吾妻鑑』は、平安末期の治承四年(一一八〇)から、文永三年(一二六六)までの一世紀弱を記録した歴史書ではあるが、かねてより誇張(デフォルメ)や虚構(フィクション)が少なからず混じっていると指摘を受けてきた。⁽³⁵⁾

私はむしろ、その「謡曲・浄瑠璃・語り物などのなか」で付けられた名が「悪路王」「赤頭」であって、そこから敷衍して彼らの事蹟がこれらの名をもって語られるようになったのだと考える。「悪路王」とは、まさに名詮自照³⁸、蝦夷地（東北）へ向かう道の困難を含めての名称であろう。

一方の「赤頭」（アカガシラ）は、遠く琉球王国への反逆者であったオヤケアカハチを想起させる。遠弥計赤蜂・於屋計赤蜂・本河原赤蜂・堀川原赤蜂などさまざまに表記されてきたが、「アカハツ（赤髪）」に由来するという「アカハチ（赤蜂）」という名は一貫している³⁹。西暦十八年に中国・新で勃発した赤眉の乱をはじめ、「赤」には反逆者・反乱軍のイメージが色濃く漂っている。

『万葉集』の「結び松」の歌で著名な有間皇子に反乱をそそのかしておきながら、それを密告して謀殺の因をなしたのち、壬申の乱で大友皇子について破れ、流刑に処せられた蘇我赤兄^{あかえ}は、いわば古代屈指の謀略家として『日本書紀』に描かれている。このように「赤」のついた名前が与えられることも、「赤」が「火」を類推させ、また「悪」に近い発音であることと関係しているのだろうか。しかし、その一方で、赤は「赤心」（裏のない忠誠心）や「赤ん坊」、あるいは雄略天皇の言葉を信じて八十年待ち続けた引田部赤猪子^{ひきたべのあかいこ}（『古事記』）などのように、純粹さや幼稚さを示すのにも使われている。

先に見た「大墓君」と「盤具公」、特に、アテルイの別の呼び名とされる「大墓君」は、「たも」「おおはか」「だいは」など、さまざまな訓み方がされていて定まっていない³⁸。朝倉授氏は「オオハカ」訓を提唱するのであるが、同稿に「高橋富雄氏が自著の『蝦夷』（一九六三年）で田茂山（たもやま）（現奥州市水沢羽田町の一部、旧田茂山村）の地名に焦点をあて、「大墓」を「タモ」と訓むことを提唱するや、その斬新な視点から新説への支持は一気に拡がった」と記す従来の通説を論破するには至っていない。

朝里樹氏は『歴史人物怪異談辞典』³⁹の「日本武尊」の項に、「鹿野山には、日本武尊が阿久留王という鬼と闘い、八つ裂きにして殺したという伝説が残されている。阿久留王は蝦夷の首長であった悪路王と同一視され」として、「この阿久留や悪路という名は、先述の悪樓や悪棲につながるっている。」と記している。「鹿野山」は「かのうざん」、現在の千葉県君津市にある鹿野山（標高三七九m）。房総半島の中央西寄りであり、浦賀水道を距てて、対岸には三浦半島が横たわる。鹿野山南麓（本来は山頂）には白鳥神社があつて、伊勢の野褒野^{のほの}に葬られたヤマトタケルが白鳥となって飛び立ち、この地に舞い降りたと伝えられている⁴⁰。

「悪樓」や「悪棲」とは、ヤマトタケルが九州の熊襲を倒した帰路、吉備国の穴海^{あなうみ}で退治した妖怪であるという。『古事記』には「穴戸神」、「日本書紀」には「悪神」「吉備穴濟神」と記され、異形のイメージで記紀に登場する、いわゆる「まつろわぬ」人々の一例と考えられる。た

だし、具体的な形象は後世に付会されたもので、たとえば近世後期の暁鐘成編『金毘羅參詣名所図会』には浦川公左によって大魚が描かれ、「悪楼」と呼ばれている^①。

さらに、東北一円には、「坂上田村麻呂の創建になるといふ縁起をもつ神社」(『東北学』九七頁)が少なくとも「五十以上」(同)あるという事実に加え、「田村麻呂や坂上氏とは接点の乏しい秋田県内」(同)でさえ「百二十をこえる田村麻呂伝説が収集されていること」に注意を払う必要がある。田村麻呂伝説の伝播力が、なぜそれほどまでに強かったのか。誰が、どのような目的で、それを東北一円に伝播させたのかという文学的課題が、ここで一気に生ずるからである。

五、田村麻呂の影

ここまで、中央(畿内)の政権が東へ北へと追いついた人たちのことを述べてきた。もちろん彼らは、当初は河内にも住んでいた人々の末裔である。少なくとも、末裔をも含んだ人たちであった。

『東北学』には、「田村麻呂伝説をめぐって」(九六頁以降)のほかにも、繰り返して田村麻呂の影が描かれる。その開基伝承や、「眠り流し」起源伝承(一五四頁)などのポジティブな光と、血なまぐさい征服者としてのネガティブな影とが緋い交ぜになって、不思議な文様を織り込んでいる。

「正史」と呼ばれる光源からの光が必ずしも明るく明瞭に対象を映し出すものではなく、逆に「稗史」(通俗史)と呼ばれて軽んじられてきた、ともすれば毒々しく彩られた光や、「地域伝承」という局地的な光(スポットライト)が決して暗くおぼろげな光ばかりではないことを示して、光と影が複雑に絡み合った印象をもたらしている。赤坂氏ならではの手際と呼ぶべきであろう。

延暦十三年(七九四)に平安京が定められてまだ間もない同二十年(八〇一)、胆沢一帯は田村麻呂たちによって「攻略」(九七頁)される。紀古佐美による第一波の征伐軍がアテルイとモレの軍によって返り討ちに遭った延暦八年(七八九)から数えて、十二年後のことであった。七八九年の時点で都はまだ長岡にあり、長岡京の十年という短い寿命のちょうど半ばに当たる。このように、アテルイやモレたち「賊類」の平定(討伐)は、朝廷にとって平安京遷都以前からの懸案事項だったことになる。征伐までの十二年の間に遷都を重ねる一方で、東北征伐の

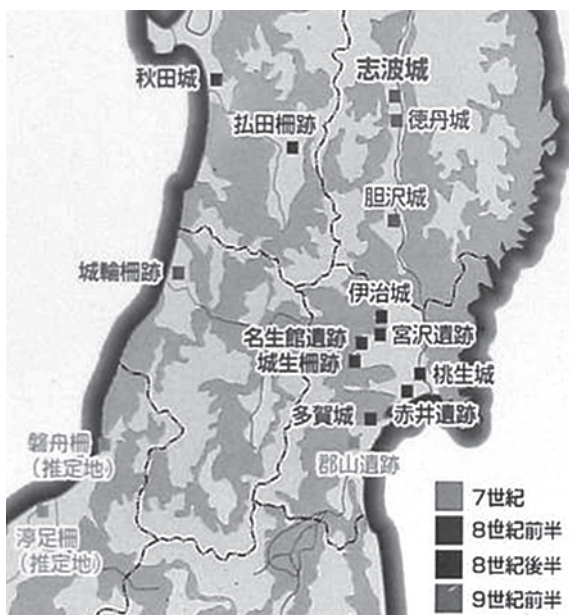


図5 古代城柵の分布と造営年代⁽⁸⁾ 盛岡市教育委員会画像提供

えられる。鎌倉期に至って、毘沙門天の武力が四天王の中でも特に優れていると考えられるに至るのも、幕府の北方守護の反映が大きかったのではないかと。そして、後世に至って田村麻呂自身が毘沙門天の化身であるという伝承が生じるのは、武家社会ゆえにわかりやすい構図であった。

また、清水寺と鞍馬寺という、平安（京都）との結びつきの強さが、ここでは注意される。鞍馬寺に関しては、そもそも平安京の北方守護として建立された経緯がある。多聞天（毘沙門天）の加護を得て悪路王（アテルイ）らを平定した田村麻呂の苦勞と歓喜は『吾妻鏡』に描か

計画が練られていたのだと考えられる。

志波城は、「子波」や「斯波」とも書き「しは（わ）のき」と呼ばれていた。

表記ではなく音声が優先したことは、聴覚的な情報が先行したことを示唆する。述べてきたように、九世紀の初め、陸奥の一角（岩手県南部の北上川流域）いわゆる「胆沢（いさわ）」が朝廷によって治められた際、その地に築造されたのが胆沢城（水沢市）であり、志波城であった（図5参照）。坂上田村麻呂が造志波城使となって、前年の胆沢城に引き続き延暦二十二年（八〇三）に築造された。その地は、盛岡市（旧岩手郡内）の太田方八丁遺跡とされている。

十二世紀と十三世紀の交に成立した『吾妻鏡』などによれば、四天王の多聞天（毘沙門天）の加護を得て、悪路王（アテルイ）らを平定した田村麻呂の辛苦は、清水寺の舞台造りに倣ったという平泉達谷の毘沙門堂に著しい。ここには、鞍馬寺の毘沙門天から分霊した百八体の毘沙門天が祀られており、現在は九間四方の堂宇に三十体足らずが残るといふ。無論、百八という数は、百八煩惱の克服を意味しているだろう。

四天王に祈って強敵を打ち果たすというストーリーは、聖徳太子と四天王寺の故事を即座に思い起こさせる。ただし、四天王といっても田村麻呂の場合は多聞天（毘沙門天）のみというのは、多聞天が北方の守護神であったからと考

れており、清水寺の舞台造に倣ったという堂宇と百八体の多聞天を祀ったことに顕著だが、日本の多聞天⇨毘沙門天信仰は鞍馬寺で始まったという。

「正史」(九四頁)には一度も登場しないという悪路王、そして赤頭の名は、既述の通り、赤坂氏によれば『吾妻鏡』以降「謡曲・浄瑠璃・語り物などのなかに、さまざまなヴァリエーションをもって語り継がれてゆく」(『東北学』)。そしてそれは、東北一円に「坂上田村麻呂の創建になるという縁起をもつ神社」(九七頁)が、少なくとも「五十以上」(同前書)あるという際立った事実へとつながってゆく。「田村麻呂や坂上氏とは接点の乏しい秋田県内」(同前書)でさえ、「百二十をこえる田村麻呂伝説が収集されていること」(同前書)に驚かされつつ、田村麻呂人気の広がり背景にあるものに目を凝らす必要を感じる。

右に、清水寺と毘沙門堂との関わりについて触れたのだが、謡曲『田村』に見える「そもそも当寺清水寺と申すは、大同二年の御草創、坂上の田村磨の御願なり」(『東北学』九八頁)という詞章や、藤原明衡筆の「清水寺縁起」に田村麻呂の清水寺創建が語られることには、さらに注意を要するだろう。すでに紙幅も尽きかけているため、この点は後考に俟ちたい。

六、おわりに

以上から読み取るべきもうひとつは、河内の辺境性である。それも、平城京から一旦長岡京を経て、平安に都が定まって以来の、さらなる辺境性である。

京の地に都(平安京)が定められる以前、とりわけ大和に都があった頃、確かに河内は地域として、もっと高い格を有していた。そもそも摂津・和泉を含んだ大河内(凡河内)として在った河内の格は、畿内五国(五畿内)の中でも、摂津より高かった。まして山城や和泉よりも明らかに高く、それは副都・陪都の位置づけに象徴された。大和と最も強く結びつき、大和にとっても交易・交通の面で重要な地域である。逆に摂津にとってみても広大な後背地として切り離すことのできない位置づけを持ち(山城との縁が深まるのは、むしろ平安京遷都以降のことになるが)、水の道で結ばれた陸の拠点という重要性が大きかった。

百舌鳥・古市の古墳群が、大和王族たちの墳墓の地であることは確かだが、そこが墳墓のみの地であったのか、あるいは河内王朝と呼ぶべ

き政権の実体がそこに存在したかという問題は、長く議論の渦中であって現在もなお解決を見ない⁽⁴⁵⁾。つまり、この地から都の跡と呼べる遺構が発掘されたわけではないものの、五世紀から七世紀いわゆる古墳時代の中・後期を通じて、言い換えれば八世紀初頭に平城京が定まる以前から、南河内の北部（羽曳野丘陵）一帯が巨大権力と関わる地であったことは間違いないことであった。

すでに何度か述べてきたように、河内のイメージは為政者や都（中央）に対する「反逆者」として描かれることが多かった⁽⁴⁶⁾。本稿に述べたアテルイたちは、平安朝廷によって「反逆者」とされた者たちであり、そもそも河内との関係を持たぬ人々であったが、特に『吾妻鏡』以来、「河内で処刑された者」として歴史に刻印された。のちの時代のことであるが、京都の四条河原で釜茹での刑に処されたという石川五右衛門が、河内有数の暴れ川である石川の名を冠して呼ばれたように⁽⁴⁷⁾、物語（赤坂氏の言う「謡曲・浄瑠璃・語り物など」）の中で、彼ら（悪路王・赤頭）もまた変容を遂げてゆく。そして、そのような「登場人物」たちのイメージは、逆に彼らと結びついた河内という土地（地域）にもイメージを分与してゆくのである。

二十一世紀を目前に控えた二〇〇〇年十一月の大きな蹉跌を乗り越えて近年目覚ましい進展を遂げている考古学と、文献学の融合から成り立つ古代学は、田村麻呂たちによって征伐された人々がはやくから日本列島に住み着いた縄文人たちの末裔であり、追い払った人たちがのちに上陸してきた弥生人と呼ばれる人たちの末裔であったという単純な二分法では理解できない複雑な経緯が、この列島で展開されていたことを示してきた。

その一方で、かつて一世を風靡しながら、もはや誰も顧みる者のいないとすら考えられていた騎馬民族征服論などが、新たな相貌を見せて復権しつつある複雑な局面をも迎えている⁽⁴⁸⁾。今後は、渡来系集落が河内という地域でどのように形成され、この地域独特の地域性の形成にどれほどの影響をもたらしたかが、考察されるべき大きな課題として残されている。

注

- (1) 「さんげん」または「さんかん」。天武天皇元年（六七二）あるいは翌年、壬申の乱直後に鈴鹿・不破・愛発^{あろよ}（のちに逢坂）に設けられた。実質的な効果には疑問が呈されることもあり、近年は「敵対」よりも内乱への「防備」であるとの説が優勢であるが、本稿では、三関設置をはじめとする朝廷の政策の総体を象徴するものとして考えておきたい。

- (2) 本稿のタイトル「河内と東北」は、時代においても、地域のレンジに関しても、バランスの悪い対比である。ただし、「大阪と東北」では近現代のイメージが強く、「河内と蝦夷」では北海道が浮上してしまう。「河内と陸奥」や「河内と奥羽」でも、求めるイメージとは離れている。以下、論中で「河内と東北」のバランスに納得していただけかもしれないと思う。
- (3) 三関は、藤原時代の延暦八年(七八九)、桓武天皇によって廃される。ただし、その後も実質的には機能し続け、九世紀以降にも有事等の際に繰り返し固関(武力によって関所の防御を固めること)がなされている。
- (4) 難波は、引き続き淀川という最大の交通路によって平安京の「外への玄関」の役割を与え続けられるわけであり、副都の役割を果たし続けることになる点で、旧都となった平城京などとは異なる。
- (5) 平野区誌刊行委員会編『平野区誌』(同委員会刊、二〇〇五年)、大阪市住吉区平野郷公益会編『平野郷町史』(同会刊、一九三一年。清文堂書店刊復刻版、一九七〇年)など参照。以下、本稿では引用文の算用数字は原則的に漢数字に改めて記す。
- (6) 拙稿「末吉宮論―中世日本との関わりの中で―」(『大阪商業大学論集』第一巻第四号、二〇一六年二月)参照。
- (7) 『平野郷 大阪市編入五〇周年誌』(平野振興会、一九八〇年)。
- (8) 図1は、大阪府提供(西大阪治水事務局掲載許可)。
- (9) 図2は、大阪市都市整備局企画防災グループ作成。
- (10) 『新訂増補国史大系(普及版) 日本後記』(吉川弘文館、一九七五年)による。
- (11) 佛教学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究』(隆文館、一九六六年)など参照。
- (12) 『日本紀略』の引用は、黒坂勝美編『国史大系(新訂増補 新装版) 日本紀略 前篇・後篇』(吉川弘文館、二〇〇〇年)を参照した。
- (13) 「言の咎」は、政敵を討って首級を持ち帰れば娘を嫁にしてやると飼犬に言い、実際そのようにしたのにもかかわらず守らなかったことから悲劇が展開する『南総里見八犬伝』のプロットをもとに、高田衛氏が命名したテクニカルーム(高田衛『八犬伝の世界(中公新書)』中央公論社、一九八〇年)を援用した。
- (14) 逆に、田村麻呂が敵将の裏切りで討ち死にをしていたと仮定すれば、それはまさに怨霊化のパターンに収まる(諏訪春雄『日本の幽霊(岩波新書)』岩波書店、一九八八年。同『靈魂の文化誌 神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較研究』勉誠出版、二〇一〇年など参照)。ここに、芸能によって怨霊の供養がなされた経路を想定しておきたい。

- (15) 注(12)において校訂はなされているが、管見の限り『日本紀略』の諸本が対照されて校異が行なわれた先例はなく、異本の発生過程や数量的な比較検討はなされていないため、この点から「榎山」「杜山」「植山」の正誤を判断することは困難である。
- (16) 赤坂憲雄『東北学／忘れられた東北（講談社学術文庫）』（講談社、二〇〇九年）参照。
- (17) 以下、『東北学』からの引用は、本文中に括弧で括って講談社学術文庫版の頁数を明記する。
- (18) 日本海に出て海路をとるにしても、西目まで一五〇km、酒田までなら二〇〇kmある。河川の水路を用いたとしても、北上川を下って石巻（太平洋）まで出たとは考えられず、当時の交通事情に鑑みれば尾花沢・敦賀を経由して北陸路（約八三〇キロ）を行ったと考えるのが妥当であろうか。京都での処断まで約一か月（『日本紀略』延暦二十一年条）かかったのは、その間の大半を移動に要したからと考えることができる。また、四月十五日の投降から田村麻呂との対面（尋問）まで三か月弱を要したのも、胆沢城の完成を待つというより、都への答申がそれだけの時間を要したことの反映であつただろう。なお、『統日本紀』は、延暦八年（七八九）の「菓伏^{すぶし}の戦い」で朝廷軍が陸道のほかに河道（北上川・衣川）や海道をとつたことを記している。特に河道は蝦夷軍の反撃に遭つて多くの犠牲者を出したが、それらの進路が実際に選ばれていたことを知る。
- (19) 片山長三編『交野町史』（大阪府北河内郡交野町役場、一九六三年）など参照。ちなみに、この段の逸話をモチーフとした「伊勢物語絵巻」（東京国立博物館蔵）は有名だが、「伊勢物語図屏風」左隻（国文学研究資料館鉄心斎文庫蔵）にも、八十二段に描かれた花見を描いている（荒木浩「文遊回廊」第一八回「伊勢物語 八十二段」『京都新聞』二〇一九年三月一八日）参照。
- (20) 七百人近い死傷者を出した昭和十四年（一九三九）の禁野陸軍弾薬庫における「昭和の大爆発」については、枚方市教育委員会文化財課編『禁野火薬庫爆発遭難手記（枚方市史資料第九集）』（同課刊、二〇一九年）に詳細に記録されている。
- (21) 守口市史編さん委員会編『守口市史（本文編第一巻）』（一九六三年）によれば、室町時代には「森口」「守口」両様の表記があり、「守口」より「森口」という表記が多いという。同市史は、守口周辺から生駒山地、特に飯盛山（南東方向）に向けて広がっていた原生林の入り口という意味の「森口」が、のちの石山本願寺（大坂城）との関わりで「守り」という意味が加わり「守口」に変遷したとする。ちなみに、「モレ」と「モリ（森）」との近似にも注意しておきたい。
- (22) 管見の限り、「杜山」という地名も現存しない。「杜山」を含む複合語地名としては、福島県に「尖杜山（とんがり森山）」があるのみ。狩り場の歴史は、古墳時代に開かれた牧（馬の放牧場）以来の土地の記憶であろう。枚方や枚岡の「枚」は、本来は「牧」であったとする説も根強い。
- (23) 都市地図・大阪府27「交野市」（昭文社、二〇二〇年十一月4版3刷）より、一部をトリミングした。

- (24) 市場については、網野善彦氏の一連の論考に詳しい。中世が中心ではあるが、『日本中世に何が起きたか』(日本エディタースクール、一九九七年、洋泉社MC文庫、二〇〇六年)所収の論考や補論「廣末保氏との対談」『市の思想』(『グラフィケーション』一九八〇年一月号)などが示唆に満ちている。
- (25) 『柏原市文化財概報二〇〇二―III 大泉遺跡群分析調査報告書』(柏原市教育委員会、二〇〇三年三月) 参照。
- (26) 田中淳夫『森と日本人の二五〇〇年』(平凡社新書) (平凡社、二〇一四年)、太田猛彦『森林飽和 国土の変貌を考える』(NHKブックス) (日本放送協会、二〇一二年)、木下勇作『交野探訪』(彩都社、二〇〇四年) など参照。
- (27) 都市地図・大阪府II「枚方市」(昭文社、二〇一九年7版1刷) より、一部をトリミングした。
- (28) 森迫博美『河内・歴史の古里』(法政出版、一九九一年)。
- (29) 戸川点『平安時代の死刑』(吉川弘文館、二〇一五年) 参照。
- (30) 戸谷学『ニギハヤヒ―『先代旧事本紀』から探る物部氏の祖神(増補新版)』(河出書房新社、二〇一六年) 二一七頁参照。
- (31) 注(28)の『河内・歴史の古里』では、「宇山の地は、従来から坂上田村麻呂の蝦夷平定の折、降伏した蝦夷の首長・大墓君阿利^ア利^リ為【たものきみあてり(る)い】と盤具公母礼【いわぐのきみもれ】の二人を延暦二二(八〇二)年に斬った(『日本紀略』)とされている」と、宇山(枚方市)がその地であるとする。その根拠は、「宇山の村名が元和元年(一六一五)より以前は上山村と称したことが文献上明らかなので、『日本紀略』(補)にある「河内国植山」が変化して「上山」になったとする考えによるものである。なお、『日本紀略』には写本の違いにより、他に「河内国相山」「河内国杜山」という別の地名も知られている。」としている。やや迂遠な考え方であるが、念のために引用しておきたい(二部傍訓を省略)。
- (32) 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』(朝日新聞社、一九九四年)「悪路王」の項(瀧波貞子氏執筆)。
- (33) 樋口知志『阿弓流為 夷俘と号すること莫かるべし』(ミネルヴァ日本評伝選) (ミネルヴァ書房、二〇一三年) 参照。ちなみに、「幼少期の田村麻呂については史料こそないものの、宝亀元年(七七〇年)に称徳天皇が崩御して光仁天皇が即位すると、父・菟田麻呂が道鏡の姦計を告げて排斥した功績により同年九月一六日(七七〇年一〇月九日)に陸奥鎮守將軍に叙任されている(宇佐八幡宮神託事件)」という高橋崇氏『坂上田村麻呂』(吉川弘文館〈人物叢書〉一九八六年新訂版)の指摘が田村麻呂と河内の関わりを示唆して興味深い。
- (34) 田村麻呂の後、文屋綿麻呂が就いたのは征夷將軍であり、平将門討伐のために將軍となった藤原忠文も征東大將軍であって征夷大將軍ではない(忠文は、藤原純友の乱に際しては、一転征西大將軍に任じられている)。よしんば彼らの中に征夷大將軍がいたとしても、頼朝は明らかに四百年前の田村麻呂を意識したのである。それは、この職位を手に入れることで、弟の義経もとも平泉の藤原一族を根絶やしにした行為が正当化されると

念じたからでもあっただろう。

- (35) 注(33)の高橋崇『坂上田村麻呂（人物叢書・新訂版）』（吉川弘文館、一九八六年）参照。
- (36) 近世後期の読本作者・曲亭馬琴が、作劇法・小説構成法のひとつとしてくり返し言及した。人の名前には、その人物の性格や人格などが表われているという考え方。それをうけて描かれた作品として『南総里見八犬伝』『近世美少年録』などがよく知られている。
- (37) 大濱永巨著、先島文化研究所編『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』（南山舎、二〇〇六年）。なお、「赤頭」は能・狂言や歌舞伎で鬼・閻魔などがつける鬘の名称であることを付記する。
- (38) 朝倉授「大墓家」銘墨書土器と「大墓公」〔会報アテルイ通信〕第六〇号、二〇一一年八月。
- (39) 朝里樹『歴史人物怪異談辞典』（幻冬舎、二〇一九年）。
- (40) ヤマトタケル伝承は日本全国に遍く分布し、白鳥になって舞い降りた先と伝えられるのは河内旧市邑（大阪府羽曳野市）をはじめ複数ある。鹿野山も、その中のひとつである。
- (41) 『曾我物語』（真名本）の一節に、「当時の世には、東は阿久留、津軽、外の浜、西は壹岐、対馬」云々とあつて、阿久留（悪路）は辺境を象徴する地名のひとつとされていたことがわかる（妖怪全友会『大佐用』第一一八号、二〇一三年三月参照）。
- (42) 新野直吉『田村麻呂と阿弔流為』（吉川弘文館、一九九四年）、阿部幹男『東北の田村語り（三弥井民俗選書）』（三弥井書店、二〇〇四年）も参照。
- (43) 盛岡市教育委員会事務局歴史文化課掲載許可。
- (44) ただし清水寺は京都盆地の東、むしろ東南の端である。四天王に祈つて強敵を討ち果たすという流れは、既述の通り、聖徳太子と四天王の故事を即座に思い起こさせる。インドでは四大陸のうち北俱盧洲ほくろくろしゅうを守護し、中国では須弥山の北方に住んだとされる。中国において、蕃夷が北方から侵入するという「北夷」の思想は、その後日本へも引き継がれた。
- (45) 近年の成果として、菅谷文則編『王権と武器と信仰』（同成社、二〇〇八年）、畠山篤『河内王朝の山海の政（叢書 L'ESPRIT NOUVEAU）』（白地社、二〇一四年）などがある。
- (46) 拙稿「河内イメージの形成と展開―河内の文芸史―」（水野正好・河内の郷土文化サークルセンター『河内文化のおもちゃ箱』批評社、二〇〇九年）参照。
- (47) 拙稿「河内人の系譜―悪党と善人をめぐって―」（『大阪春秋』第一五六号・特集「河内人の足あと」総論、二〇一四年一〇月）参照。

(48) 水野祐『日本古代の国家形成 征服王朝と天皇家 (講談社現代新書)』(講談社、一九六七年) など参照。

【謝辞】

本稿を成稿するに当たり、図版掲載の許可をいただいた大阪府西大阪治水事務局・大阪市都市整備局・昭文社メディアソリューション部・盛岡市教育委員会事務局の関係各位に、また、特に図版の取り扱い等についてご助力いただいた大阪商業大学学術研究室の岡村良子氏に御礼申し上げます。そして、盛岡を拠点としてレンタカーで縦横無尽に走り回り、本稿に関する地域の土地勘と景観を筆者にもたらしめてくれた宅一之介氏(本学大学院地域政策学研究科修了)に謝意を表します。